

子どものミカタ・発達のミカタ

周囲の人々が子どもの味方となるよう子どもの見方・発達の見方をご紹介しています。

今回のシリーズは、今号で最終回です。



困ったときに助言をもらえる人がいる



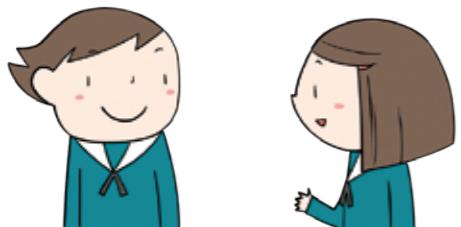
Nさんは小学生のころ、困ったことがあるとどうしていいかわからず、動けなくなってしまい、その場に立ちすくむことがありました。



お母さんはそんなNさんを見て、困ったときはヘルプサインを出して助けてもらいながら成長していくといいなと思い、担任の先生に相談しました。そこで、先生はNさんと話す時間を作り、困ったときには先生の近くに行く、先生を呼ぶ、手を挙げるなどできそうなことを話し合いました。



あのさ…



その後も、立ちすくんでいる様子があった時は先生から声をかけていましたが、少しずつNさんからも発信できるようになってきました。

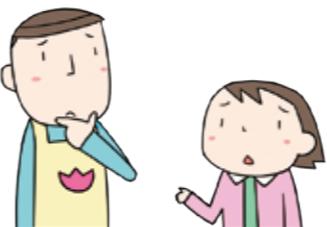
中学生になった今では、少しずつ自己理解が進み、自分がどんなことで困っているかがわかるようになってきました。苦手なことがあった時や困った時には、自分で工夫をしたり、先生や友だちに助けを求めたりしながら生活しています。



失敗しても再チャレンジする力につける



年中のGくんは、おゆうぎ会の練習でうまく踊れず、みんなに笑われてしまったことがあります。その経験から、みんなの前での発表や注目される機会があると、暴れたりその場から逃げてしまったりするようになりました。



それを聞いた先生は、Gくんの気持ちを受け止めるようにしました。そして、不安な気持ちになったときは、部屋の中でみんなの様子を見ていてもよいこと、できるところまでやってみること、おゆうぎの得意なKちゃんのマネをすればいいことなどを具体的に伝えました。

はじめのうちは、うまくいかないこともあります。しかし、小さな成功を積み重ねていき、みんなの前で発表したり、注目されたりすることにも少しずつ自信が持ててきました。

困った先生はGくんのお母さんに相談してみました。すると、おゆうぎ会の練習をきっかけに、たくさんの人が見ている場になると、「次も上手にできないかも…」と不安になったり、「どうせまたみんなに笑われる」という気持ちになり、どうしていいかわからなくなってしまうなどのことでした。



今号の記事は実際の事例をもとに内容を再構成いたしました。



まとめ

子どもたちの「人と関わりたい」「こんな活動をしたい」といったさまざまな思いを育むためには、子どもを取り巻く地域の人たち(先生、友だちなど)の協力が必要です。しかし、子どもたちの中には、付き合いの幅を広げることでかえって生きにくさを感じることもあります。そんな時は、一番身近な家族と安心感や信頼感を無理せず築いていくことが大切です。成功体験を積み重ね、楽しめる活動を増やしていくことで、何かうまくいかないことがあったときに失敗を共有できたり、困ったときに相談できたりする関係を築くことができていきます。



そこから子どもたちのよき理解者として家族が橋渡しをしながら少しずつ保育園や幼稚園、学校に協力の輪が広がっていくのだと思います。子どもと“どうやって良い経験を増やしていくばいいのか”、“周りへの橋渡しがうまくいかない”、“どのように周囲に伝えていったらいいのかわからない”、ということがあるかもしれません。そのようなときは、「げんき」がご家族に寄り添いながら、地域との橋渡しをサポートさせていただきますので、一度ご相談ください。